

NEW ヒライ信

VOL.2
NO. 58
(第158号)

がくしゅう 楽習塾 塾長 平井 幸雄

hiraisin@par.odn.ne.jp



古希の祝い

私は齢70歳・古希を迎えた。「古希」は、唐の詩人・杜甫の曲江詩「人生七十古来稀なり」(七十年生きる人は古くから稀である・詩の全文を下に掲げる)に由来する。70歳まで生きることが、今や稀ではなく当たり前、生きられない方が稀だ。ふだんあまり音信のない息子から、家族皆で私の古希を祝ってくれるという連絡が入った。こ(これまででない) きなこと喜んだ。(実は息子の嫁が配慮してくれたようだ)
こき使われて70年、小気味よく送れた人生70年、充実の味が濃き七十年人生を感じつつ、大きく呼気→吸気の深呼吸をして、親子電話の子機を使って「ありがとう」と電話をした。・・・

酒に呑まれて借金にまみれるという杜甫の暮らしぶり、「どうせ七十年も生きられないのだから」という言葉には、長寿を祝う「古希」にふさわしくない。

(杜甫、四十七歳の作)

【現代訳】朝廷での仕事を終えて退出するたびに、服を質(しち)に入れ、その金で酒に酔い痴れて家に帰る。
そのせいで、酒代の借金も当たり前のこととなり、あちこちにたまっている。
しかし人の寿命には限りがあって、古来、七十年まで長生きする者はめずらしいのだ。
杜甫はこの後、花の間を舞う蝶や、水辺をすいすいと飛ぶとんぼを眺めつつ、しばしの間、この春の景色を楽しもうかと、と詩を結んでいる。

伝語風光共流転

風光に伝語す 共に流転しつつ 暫時 相賞して相違うこと莫らんと

暫時相賞莫相違

穿花キヨ蝶深深見

花を穿つ 蝶は深深として見え 水に点する蜻蛉款款として飛ぶ

点水蜻蛉イ款款飛

酒債尋常行処に有り

酒債 尋常 行く処に有り

人生七十古来稀

人生七十 古来稀なり

朝回日日典春衣

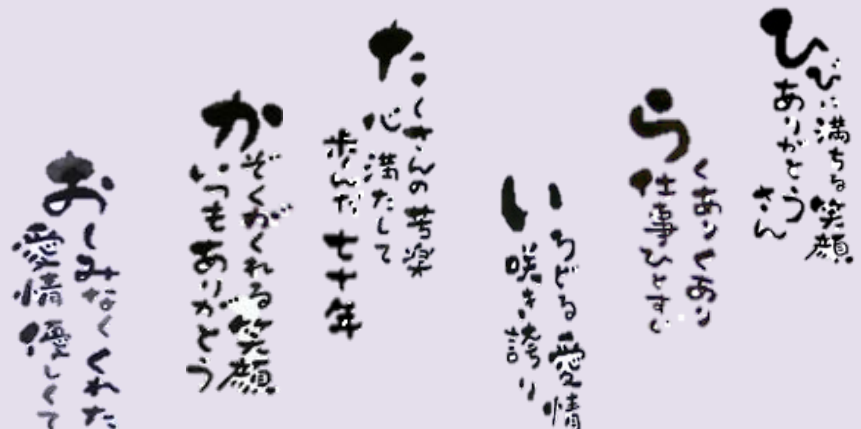
朝より回りにて日日春衣を典し

毎日江頭尽醉帰

毎日江頭に酔いを尽くして帰る

- ① とが大好き
- ② くてん家
- ③ つも笑顔で
- ④ くさんの楽しみ
- ⑤ 族の愛に助けられ
- ⑥ もしろおかしく70年

私も古希を迎えた日に、酒を呑みながら、自分の名前を折り込んで詩を詠んでみた。また、家族一人ひとりの名前も折り込んだ詩を詠み、これを礼状とした。



古稀のプレゼント

古稀を迎え家族から祝いの酒をプレゼントしてもらった。落語の芸名「三遊亭圓塾」をあしらったラベルの酒である。酒好きの私にとって何よりの贈り物。一気に飲み干して酔いしれたいところだが・・・



杜甫は、酒におぼれながらも、どこまでも生真面目に、家族を想い、国の行く末を案じ、古稀にはまだ遠い五十九歳で没したそう。杜甫と並んで有名な詩人・李白も数多く酒の詩を詠んだ。そのうちの一つ、「人生はたかだか百年、あっという間に過ぎ去ってしまうのだから、酒でも飲んでのびのびと過ごそうではないか」と詠っています。私も、あと30年この酒を飲みながら百歳までのんびりと生きよう。

え	ん	じ	ゆ	く
の	境	地	ま	で
え	ん	じ	ゆ	く
落	語	の	芸	を
え	ん	じ	ゆ	く

円 熟
の境地まで
圓 塾
落語の芸を
演じゆく



息子から高麗人参酒のプレゼントもあった健康を気遣ってくれたのかな？

← 家族から贈られた純米大吟醸金箔入りの「三遊亭圓塾」ラベルの日本酒
1800mlピンの色が古稀の色・紫
新潟・今代司酒造 謹製

ハメ字文とは、5×5、7×7のマス目の中央にかぎ文字をクロスさせ、空いているマス目に文字を入れ、粹で洒落た文章を作る言葉あそび

いつも酒を飲んで「ハメ」を外しているが、祝い酒を飲みながら、ふと閃いて、自分の名前+「メ」をハメ込み、それを折り込んだ「ハメ字文」を詠んでみた。

続	長	で	ひ	頭	か	古
け	寿	百	ら	を	え	稀
る	わ	を	め	き	た	の
ひ	ら	め	い	た	か	お
ら	い	ざ	た	え	ら	祝
い	満	し	か	常	に	い
信	載	て	お	に	や	む

古稀のお祝い迎えたからにゃ、頭鍛え、常に閃いた顔で、百を目指して長寿。笑い満載、続ける「ヒライ信」

頭	ど	頓	ひ	笑	使	古
脳	こ	智	ら	顔	い	稀
の	か	と	め	を	わ	な
ひ	ら	め	い	た	か	お
ら	で	ど	た	や	さ	体
め	る	な	か	さ	保	こ
き	か	く	お	す	ち	き

古稀なお体こきつかい、若さ保ち、笑顔を絶やさず、閃いた顔、頓智、とめどなく、どこから出るか、頭脳のひらめき。